

# 江戸の都市空間における垂直性の表象

## Representation of Verticality in Urban Space of Edo

学籍番号 56833

氏名 千種 成顕 (Chigusa, Nariaki)

指導教員 大野 秀敏 教授

### 0. 序

本論は、江戸の都市空間において垂直性がどのような意味とかたちを持ったのか検討する事を目的とした研究である。

当時の江戸の都市図を見ると均質な瓦屋根が続く水平的な風景を見る事ができる。本論はこのような垂直要素の欠落した都市風景に注目した。垂直要素の欠落も一つの垂直性の現れとして、江戸の都市空間を構成する成分である垂直性全般を対象に表象研究を行った。

本論の構成は、まず表象研究という性格上、垂直性の象徴性自体の性質を明らかにし (1)、江戸に高さを象徴的に見せるような垂直要素が存在したかを既往研究 (2) 及び『江戸名所図会』における江戸の都市空間において検討し (3)、その他の垂直性の形象を作法という形でまとめた (4)。

### 1. 垂直性に関する象徴性

#### 1.1. 世界の軸

宗教学者のミルチャ・エリアーデは「世界の軸」という概念を、天との交流を目的とした外的世界 (カオス) に対する内的世界 (コスモス) の起点として位置づけ、柱 (宇宙の柱)、梯子、山、樹、蔓等、様々の形象によって表現されると説明した。日本における「世界の軸」としては山岳信仰や柱信仰を挙げる事が出来るであろう。いずれも原始的な宗教

形態が発達したもので、信仰対象を神とする、信仰対象に神が住み着く、信仰対象に神が降りてくるという三形態を持っている。このように仮に対象物の垂直要素が際立っている時、その垂直性は天との交流を感じさせる性質を表象する事がある。

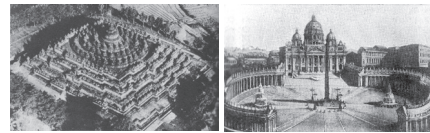


図1 ボルブドゥール、バチカン、オベリスク

#### 1.2. 脱魂型と憑依型

そのようなモニュメントとして際立った例が塔と呼ばれる建物である。塔の高さが作る象徴性には上昇性、下降性といった運動的側面が存在する。マグダ・レヴィッツ・アレクサンダーは『塔の思想』の中で、西洋の塔は人間の高所衝動 (自己をより高みに達せようとする無限の衝動) によって永遠の上昇指向性を内に秘めていると主張した。それに対して梅原猛は塔の先端である相輪が塔の下に埋められた舍利に対する標識的役割をしている事に注目し、仏教の完成された死生観を表象する仏塔の下降性を西洋の塔と対比してみせ、塔を「生と死の相克の表現」と位置づけている。

このような対比は脱魂型と憑依型シャーマニズムによって説明が出来よう。宗教人類学の佐々木宏幹はこれらを以下のように説明する。「脱魂型シャーマンは上昇的であり、自

己（靈魂）を超自然的領域に向けて拡大させようとするのに対し、憑依型のシャーマンは下降的であり、自己に向けて超自然的領域を集中させようとする。前者は遠心的であり、後者は求心的である。」

アレクサンダーの言及する人の高所衝動はまさに脱魂的行動様式であり、対して仏塔の根元に舍利を埋める行為は憑依的行動様式と言えるであろう。

梅原と同様、多田道太郎も象徴性の下降的性質に興味を持った一人である。多田は日本の

の凧は天空を舞うものではなく、地を這うものではないかと考えた。実際、江戸



図2 角凧、マレーシアの凧

で隆盛した武者絵の描かれた角凧とアジアで多くみられる鳥などの具象的な凧を比較すると、江戸のものは明らかに鳥が表す上昇しようとする意思が感じられない。他にも多田は日本の天空指向性の欠落に関して指摘して、日本を憑依型の強い社会と位置づけた。

また、櫻井徳太郎は日本の山中他界の概念を、靈魂が上昇する垂直的「異郷的他界観」と死霊が付近の霊山に留まる水平的「死後他界観」に分類している。このような死後他界観の表れである山の麓に建てられる神社と村

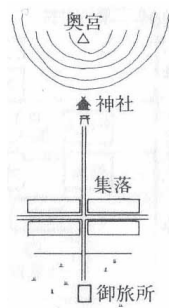


図3 村の構成

脱魂型シャーマニズム	憑依型シャーマニズム
上昇性	下降性
垂直性	水平性
遠心的	求心的
発散的	集中的
無限性を前提とする	有限性を前提とする
具象形態の凧	矩形の凧
異郷的他界観	死後他界観
山頂	山の麓、中腹
教会の塔	仏塔
『塔の思想』	『奥の思想』

図4 垂直性の運動ベクトルの特徴

落コミュニティの水平的関係性から日本独特の空間概念として奥の思想を唱えたのが槇文彦である。槇は「『奥』は水平性を強調し、見えざる深さにその象徴性を求める」と述べた。これは塔の視覚的に訴えかける象徴性と対立する垂直性（もしくは垂直性の無さ）の象徴性であろう。このような象徴性は江戸に少なからぬ影響を与えた。

## 2. 江戸の都市景観

愛宕山から幕末の江戸を眺めた者の多くが江戸の鳥瞰風景を海や田んぼと言った平たいもので形容した。そのような都市空間は厳しい階数規制、高さ規制が作り上げたのだが、だからこそ逆にシンボリックな高さを幕府や宗教組織が作ることが容易であったとも言える。しかし、実際の都市計画や武家屋敷、江戸城を見ていくと、控えめな高さの主張しか感じない。特に江戸城の天守閣は当初明らかに見られる事を強く意識したデザインであったにもかかわらず、そのようなモニュメントが明暦の大火後再建されなかったことは本論にとって非常に興味深い。以上より天守閣無き江戸に際立った垂直要素はなかった事を予想する事ができる。

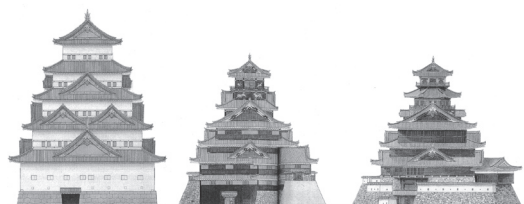


図5 江戸城、大阪城、安土城天守再現図

## 3. 江戸名所図会を利用した垂直要素の分析

### 3.1. 江戸名所図会

『江戸名所図会』（以下、図会と呼ぶ）は名所項目数千四十四にも及ぶ江戸時代の名所案内の決定版であり、その取り扱い範囲も江戸を超えて武蔵、相模、下総を含む非常に広い

ものとなっている。本論において 当資料を対象に分析を行う理由を、1 描写の写実性が他の資料と比べて高い 2 写実的な俯瞰描写が極めて多い 3 大衆の日常を中心に描かれているとした。

### 3.2. 名所の類型と分析

まず690枚の図版に記載されている表題を使って名所の類型化と統計を行い(表1)、名所化された垂直要素の存在を確認した。そのほとんどが宗教施設で、次点が水に関する名所であった。また、火の見櫓や江戸城を名所として扱われた物は存在しなかった。

### 3.3. スカイラインの分析

図版に描かれている遠景を366景採取し、その中に描かれているスカイラインを作り上げている要素を類型化し統計を行い(表2)、実際に垂直要素として見えたであろう要素を明らかにする。山並みや樹木や棟の高さの揃った住宅群など平たい風景を突き抜けてスカイラインを構成する物の多くは大屋根であり、次点が火の見櫓であった。

### 3.4. 象徴性に関する分析

3.2、3.3よりその象徴性を分析する対象を宗教施設、火の見櫓、仏塔、それ以外の方形屋根をもった建築(以下、方形建築と呼ぶ)とした。それらの分析を通して「高さ」(宗教施設、火の見櫓、仏塔)や「四面对象の形態」(火の見櫓、仏塔、方形建築)がその建築の象徴性を高める事と関連性があるか検討した。

多くの宗教施設の中心的建物は、比較的他の周りの建物より高く建てようとする傾向が見られるが、多くは樹木を超える程高く建てられなかった(表3)。また、火の見櫓、仏塔、それ以外の方形屋根を持った建築についてもその象徴性の見せ方について統計を用いて(表4、5、6)分析を行ったところ、どの分析

表1 名所とされるもの

宗教施設	415
橋	31
店、名産、工場	29
川	29
河岸、土手、浜、海辺、塩浜	27
墓、塚	23
眺望	21
祭り	20
樹木	19
池	18
山	15
坂	15
原、馬場、旧跡、木場	15
泉、井戸	14
林泉、庭	10
通り、道	9
茶屋、茶販	7
門、戸	6
市	5
林、森	4
石、岩	3
芝居小屋、土弓	3
地蔵、大仏	2
駅	2
谷	2
塔	1
丘	1
その他(場所、行事、名所以外)	166

表2 遠景

樹木	347
山	167
高さが同様な屋根群	137
高さが突出した大屋根	29
火の見櫓、はしご	8
五重塔	3
材木屋の木材	2
江戸城	1
網	1
旗	1
寺の旗を掲げる棒	1
のぼり	1
見世物小屋の屋根	1

表3 宗教施設の中心的建物

A		344
対象数	(100%)	237
中心的建物<一番高い建物	(69%)	96
中心的建物<一番高いもの	(28%)	
B		344
対象数	(100%)	150
立体的形態	(44%)	59
中心的建物<一番上に建っている	(17%)	
形態		
C		78
前面に採算のある中心的建物の数	(20%)	
中心的建物>採算	(24%)	21
中心的建物<採算	(27%)	33
中心的建物<採算	(42%)	

表4 火の見櫓

	高さ	通りに面している
fi3-5-2-1-2	○	○
fi3-5-2-1-3	○	○
fi3-5-2-1-4	○	×
fi3-5-2-1-5	○	×
fi3-5-2-1-6	○	×
fi3-5-2-1-7	○	×

表5 仏塔

	形態の屋根	高さ	軸線
fi3-5-2-2-2	大	○	○
fi3-5-2-2-3	小	×	○
fi3-5-2-2-4	小	○	×
fi3-5-2-2-5	大	×	×
fi3-5-2-2-6	大	○	×
fi3-5-2-2-7	大	○	×
fi3-5-2-2-8	大	○	○

表6 方形屋根をもった建築

軸線上に建てられている、かつ	2	3
同一平面で一番高い建物である	(22.3%)	
軸線上に建てられていない、かつ	8	
同一平面で一番高い建物である	(7.8%)	
軸線上に建てられている、かつ	1	1
同一平面で一番高い建物でない	(10.7%)	
軸線上に建てられていない、かつ	6	1
同一平面で一番高い建物でない	(59.2%)	

においてもその形態が映えるような周辺関係を持っているものと、そうでないものに対して、両者は特別な偏りが確認されなかった。

以上の分析から、図会に描かれている江戸の都市空間では、ある固有のビルディングタイプがモニュメンタルな象徴性を高さを用いて獲得するという事は無かった。むしろ周辺環境などの初期条件に対応して固有の象徴性を作り出していた事が予想できる。



図6 「東叡山寛永寺」桜の峰 山王社の遠景

## 4. 江戸の垂直性の表象

本章では、江戸において垂直性に関する形や場の作られ方を「垂直性の形象に関する作法」として13項目にまとめた。これらの多くは視線に対して水平的、下降的、もしくは視線の運動を抑制する性質を持ったものであった。

### 0 1. かかげる

江戸の人はよく仮設的なものを上方に掲げる。それは、縁起物や身分を表す標識などがある。

### 0 2. はためかす

広重の『名所江戸百景』に多く取りあげられているように、七夕飾りや鯉のぼり、旗、のぼりなど、ひらひらとはためくものを多くみる事が出来る。

### 0 3. 水平性を強調する

多くの建物は高欄や軒などが水平性を強調したり単純に平面的な床が積まれる構成をしている。坂道にある屋敷の塀に関してそれは水平を連続した形態である。

### 0 4. 三角形を好む

富士山や大屋根から物の積み方に至るまで、江戸では多くの三角形をみる事が出来る。また能の舞台に描かれる松の木は三角を連ねて構成される。

### 0 5. 屋根をかける

地蔵や高札、社など格の高い物や神聖な物には屋根がかけられる。

### 0 6. 目上にあげる

身分を相対的な高さの差で表す。

### 0 7. 秘める

神の社や本社は樹木で覆われたり石塔で囲まれたり岩壁に穴をくりぬいて埋められたりする。それは樹木が縦にのびたものより横に広がった物が好まれた事とも関係が見いだせる。

### 0 8. 変化に富む

大名行列の志向性の強い様々な色や形の槍や、火消しの纏など江戸の頭上は多様な物で飾られた。

### 0 9. 境界を作る

鳥居やしめ縄、のれんや高さを持った橋、階段など、境界は薄く、暗示的である。

### 1 0. 発散させる

二股に割れる形態の樹木や多焦点的に高い建物が建つ寺院伽藍など垂直物は発散的に建てられる。

### 1 1. 相似形をつくる

江戸では形が様々な大きさをまとう。北斎が屋根の破風を富士と見立てたように、屋根型は繰り返し用いられるモチーフである。また模造品を作る事も多く見られる。

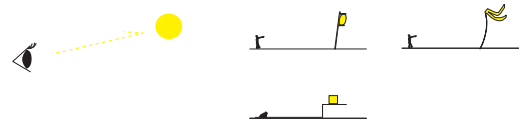
### 1 2. 眺める場所をつくる

自然の景観を楽しむために清水の舞台を作ったり二階に縁を張り出した。

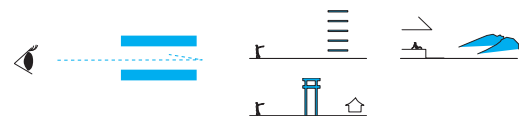
### 1 3. 防火を優先させる

都市の高さ規制が厳しい中、火の見櫓が景観を多く占めた。また、鯨や鳳凰の彫刻、奴風などはどれも火除けのまじないの意味がある。

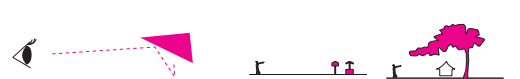
イ. 視線を対象で止める



ロ. 視線を水平に流す



ハ. 視線を下降させる



ニ. 視線を一つの対象に定めない



ホ. その他



図7 作法の視線に関する性質

## 5. 結

江戸は高さに消極的な町であった。棟の高さが揃っている住宅はみな低い様相を示しており、実用的な火の見櫓が点々と建ち並び、町のシンボルとしての天守閣も存在しなかった。しかしそれは垂直性の発想が貧相だったわけではなく、上昇的な運動性を持った垂直性を発想をする文化的土壌が存在しなかったからである。その垂直性の運動的側面を、本論ではその地域の社会に通底する人の死生観に求めた。

また、江戸の下降指向の垂直性の表現は多様で豊かな物であったといえる。江戸の高さは身体に対して親密な関係にある。高い場所にあるものでも空よりむしろ地面に接続されている印象を受ける。凧や神棚、樹木の形態といったものが好例であろう。それは神や魂が身近な場所まで降りてくる憑依的な性質がよく表れている、有限性を持った高さと言えよう。